42008ISBN 978-4-87424-410-4http:/

文学からの接近：古典文学史
—— 時代区分とジャンルを中心に ——

山田　恭子（やまだ・きょうこ）

1. はじめに

本稿ではまず，韓国古典文学史を考える上で重要な時代区分やジャンルについて言及し，韓国古典文学の全体像を把握することを目的とする．これは今まで個々の作品を知っていても，それが他の作品とどのように有機的なつながりを持っているのかを理解できない場合が多く，ややもすると断片的な知識になりがちな古典文学の姿を，巨視的にとらえることが非常に重要であると判断したためである．無論ここでは膨大な作品の詳細を見ることは不可能である．しかし，おおよその流れをつかみ，その特徴を知ることで，目的を果たしたい．

2. 時代区分

韓国古典文学はまず口碑（こうひ）文学（구비문학　クビムナク）[1] と記録文学に分けられる．さらに記録文学は漢字漢文で書かれた漢文学，ハングルで書かれた国文文学があるが，これらの関係は時代によって各々変化した．したがって文学史の時代区分についてはいろいろな説があるが，おおむね口碑文学，漢文学，国文文学の関係から，古代前後期，中世前後期，近世，近代の 6 期に分けて理解できる．[2] ここでは韓国古典文学史として主に古代から近世までの文学に焦点を当てる．

2. 1. 古代文学

古代とは，最初に口碑文学があり，紀元前後，記録文学の礎（いしずえ）である漢文学を

---

1) 韓国では口承文学のことを口碑文学という．これは半島に比較的金石文が多く残っていることにも由来するといえよう．

2) 古代文学の前に原始文学をあげる説もある．조동일(1994:57-69)参照．しかし，ここではすべて古代文学とした．なお北朝鮮では，原始，古代，中世，近代と分けている．原始文学としては古朝鮮の神話，古代文学のとしては「箜篌引」（コンフイン　공후인），「解慕漱神話」（ヘモスシヌァ　해모수신화）などをあげている．また三国時代初めの 1 世紀から 19 世紀中葉，1865 年頃までを中世としている．なお中世に関しては 1-7 世紀，7-9 世紀，10-14 世紀（10-12 世紀前半，12 世紀後半-14 世紀），15-17 世紀前半，17 世紀後半-19 世紀中葉と，6 期に分ける方法がなされているようである．설성경・유영대(1990)参照．

受容し始め，5 世紀以前に漢文学が成立するまでの時代をさす．

古代前期には口碑文学のみが存在したと考えられる．それは後に叙事巫歌（서사무가）の「帝釈本解」（제석본풀이）などに発展していった．「帝釈本解」の内容は以下のようである．

裕福な家に 1 人の娘がいて，大切に扱われていた．ある日両親は娘を置いて出かけなければならない用事ができ，娘は一人家で留守番をしていた．そのとき道僧が尋ねてきて布施米を請うた．娘は米を袋に入れるが，穴が開いていてなかなか米がたまらなかった．こうしているうちに夜遅くなり，僧は娘の家に一晩泊まることになった．道僧が帰った後，娘がはらんだことを知った両親は激怒し，娘を家から追放する．娘は僧を訪ねて行き，そのまま住みつき 3 人の息子を生んだ．道僧はそれが自分の息子であることを確認するために試練を課し，双方の血が再結合したことで父子関係を認めた．

このような内容は，超現実的方法によって父母の承諾もなしに妊娠し追い出される点や，息子と父親との出会いと親子関係の確認が行われる点で，李圭報（이규보 1169-1241）の『東国李相国集』（동국이상국집 1241）の「東明王篇」（동명왕편）にある朱蒙神話（주몽신화）に，その脈が引き継がれる．[3]

古代後期とは，建国神話の出現，漢字伝来と漢文学の成立，郷歌（향가）の形成に至るまでの時代をさす．主な神話の内容は檀君神話（단군신화），解慕漱神話（해모수신화），[4] 首露夫人（수로부인）にまつわる「亀旨歌」（구지가）や「献花歌」（헌화가）として後に記録され，『三国遺事』（삼국유사）[5] に残されている．その他に，英雄伝については「温達伝」（온달전）などが『三国史記』（삼국사

---

3) 金東旭他(1983:33-35)参照.

4) 解慕漱神話とは高句麗（こうくり 고구려）始祖東明聖王（トンミョンソンワン 동명성왕）の開国説話にちなんだ解慕漱についての神話である．『三国史記』には，解慕漱は天帝を自称し北夫餘（プヨ 부여）の伝説的な王として，天帝の息子である扶餘王・解夫婁（ヘブル 해부루）が迦葉原に遷都した後，もとの地を都に定め東夫餘とし，その一方で河伯（ハベク 하백）の娘・柳花（ユファ 유화）とも野合し朱蒙を生んだとされる．『三国遺事』「北夫餘」には，解慕漱が北夫餘を建国し解夫婁を生んだことになっている．また，『三国遺事』「紀異編」（きいへん）高句麗条には「檀君紀」（だんくんぎ）を引用して，夫婁と朱蒙はともに檀君を父とする腹違いの兄弟だとする．

5) 一然（イリョン 일연 1206-1289）が 1281 年に撰述した．全体は 5 巻 2 冊からなっており，別途に王暦，紀異，興法，塔像，義解，神呪，感通，避隠，孝善など，9 編に分類され記述されている．当時は武臣乱と蒙古の侵攻による混乱の時代だった．『三国遺事』は勅撰ではなく，説話や仏教に関する資料に基づき構成されている．したがって，自由な形式で書かれた紀伝体でない野史である．

기）[6] に収録されている．[7]

2.2. 中世文学

中世は漢文学の時代である．科挙（かきょ）（과거）制度の前身ともいえる新羅（しらぎ）（シルラ 신라）の読書出身科が788年に，本格的な科挙試験は958年に実施されたことも漢文学の隆盛とつながった．しかし漢文学は国文文学とも共存した．最初は漢字を利用した吏読（りとう）(이두)[8] を通じて，次には朝鮮語を直接表記できる訓民正音（くんみんせいおん）（フンミンジョンウム 훈민정음）との併用によってである．

中世前期は郷歌と漢文学，特に漢詩が盛行した．またこの時代は文学享有（きょうゆう）層の違いによって，六頭品（육두품）を中心とした新羅末期までと，門閥（もんばつ）貴族を中心とした高麗前期までの2つに細分でき，ほぼ中国の唐宋時代に相当する．

郷歌とは新羅の歌謡であり，郷札（ヒャンチャル）（향찰）で表記された歌の名前である．狭義の郷歌とは，新羅の三国統一期である6世紀頃から高麗（こうらい）（コリョ 고려）中期である13世紀まで存在した文学形式を意味する．しかし広義の郷歌とは紀元前からあった形式で中国漢詩に対する当時の朝鮮の歌謡を広くさす呼称であった．

郷歌には4，8，10句体がある．4句体は民謡風の歌で，8，10句体は仏教的貴族文化を背景に歌われた叙情的な歌である．特に10句体の郷歌は統一新羅時代に表れた郷歌の完成形とされ，これを詞脳歌（サヌェガ）（사뇌가）という1つのジャンル概念として理解することもある．記録に残る最も古い10句体の郷歌には6世紀末成立の「彗星歌（ヘソンガ）」（혜성가）[9] がある．現存する郷歌としては『三国遺事』に14

---

6) 『三国史記』は妙清（ミョチョン 묘청）の乱(1135)で分裂した民心を慰撫し，国王中心の中央集権体制を強化し，大陸に新しく登場した金との関係で柔軟な平和的外交術で安全性を求めようという目的で編纂された．したがって三国の歴史を整理するのに，覇権的な論理で中国と戦い敗れた高句麗の伝統より，柔軟な外交術と忠義の道徳精神で三国統一をなした新羅の歴史を高く評価する立場から叙述された．また，紀伝体で編纂されたが，中国の紀伝体の場合，臣下の伝記である列伝が全体の60%程度になるのに比べ，『三国史記』は20%内外の分量で，帝王の本紀のほうが60%程度に及ぶ．このような項目の配分は中国とは異なる独自な特徴を示す．

7) 金東旭(1974:35-51)参照.

8) 吏読とは，漢字借用表記法の総称である．広義では郷札（ヒャンチャル 향찰）や口訣（クギョル 구결）が吏読に含まれる．郷札という名称は新羅語で綴った文章をさす言葉で，唐文に対する相対的な意味で用いられている．

9) 新羅，真平王（チンピョンワン 진평왕 579-631）時代に融天師（ユンチョンサ 융천사）が作った10句体の郷歌.『三国遺事』によると，三人の花郎（ファラン 화랑）が遊覧に出かけようとした時，突然，彗星が心大星を犯したので花郎達が遊覧を中止しようとしたところ，融天師がこの歌を歌い，その異変がなくなり，一方で侵路しかけて来た倭

首，『均如伝』（균여전）収録の「普賢十願歌」（보현십원가）11 首の計 25 首が残っている．郷歌は新羅末(935)まで盛行したが，その後しだいに衰退した．12 世紀に作られ「悼二将歌」（도이장가），[10]「鄭瓜亭曲」（정과정곡）[11] などは，衰退期の郷歌である．

この時期の漢文学としては，高句麗人の堂々とした気概をよくあらわした乙支文徳（을지문덕）の「与隋将于仲文詩」（여수장우중문시）が『三国史記』に収録されている．高麗の漢文学は，初期の文権を掌握した崔承老（최승로 927-989）と漢詩文の才能で宋人を驚かせた朴寅亮（박인량 ?-1096）からはじまる．特に朴寅亮は『殊異伝』（수이전）を著し新羅時代の説話を集大成させたが，その内容には唐で活躍した崔致遠（최치원 857-?）にまつわる逸話も伝わる．金富軾（김부식 1075-1151）は高麗一代の文豪で『三国史記』の編纂により名声を残した．この本は紀伝体でできた歴史書で，一然の『三国遺事』とともに古代歴史書の双璧である．

中世後期は武士政権の成立以降，高麗時代からの門閥貴族と新興士大夫の文学が共存した時代である．12 世紀の景幾体歌（경기체가）[12]「翰林別曲」（한림별곡）の誕生に始まり，宮中で高麗俗謡（고려속요）が演奏され，禅宗で歌辞（가사）が作られ始めた高麗後期と，楽章（악장）や時調（시조）が作られた朝鮮（チョソン 조선）前期の 16 世紀までをいう．これはほぼ中国の元明時代に相当する．またこの時代には稗官文学（패관문학）とされる漢文随筆をはじめ，漢詩文集『東文選』（동문선）のほか，散文として仮伝や夢遊録も作られる．

「翰林別曲」は 1259 年頃，翰林諸儒によって成立した．8 章からなるが，4 章以下の内容はみな享楽的で豪放なものである．各章の最後の部分が「○○景，それいかならん」とあることから景幾体歌という．[13]

高麗俗謡は「西京別曲」（서경별곡），「カシリ」（가시리）の連綿とした別

寇が退いたという内容である．

10) 睿宗（イェジョン 예종）の「悼二將歌」(1120)は郷札で表記された最後の郷歌とされる．内容は，亡くなった二功臣を讃える歌である．

11) 鄭敍（チョンソ 정서）の「鄭瓜亭曲」(1170)は高麗俗謡で「忠臣恋君の詞」の嚆矢である．形式としては郷歌の 10 句体形式を残すものである．内容は，讒言によって罪に問われた忠臣が，主君を想って身の潔白を歌ったものである．

12) 歌の各章の末尾に「景いかならん」，または「景幾何如」という句がついており，高麗中期以降から朝鮮初期にかけて主に儒学者たちによって歌われた．景幾何如歌（キョンギハヨガ 경기하여가）ともいう．

13) 金東旭他(1983:181)参照.